



まふくだまろ こい いなばちよう
麻福田磨の恋 (稲葉町)

岸和田の山手、山直中の牛滝川沿いに「まぶたさん」とよばれる古跡があります。「まぶたさん」には次のような話が伝わっています。

ずっと昔、山手が河内の国と呼ばれていた頃、この稲葉の里に富裕の家がありました。その屋敷にはたいそう可愛がられているひとりの娘がおりました。娘は大切に育てられ、琴や書などの習い事をしていました。屋敷の外にはほとんど出ることありません。庭にある大小の池や小山をめぐったり、東屋で小鳥のさえずりを楽しんだりして、日々を過ごしていました。村人は、屋敷から流れる琴の音に聴き惚れながら、つま弾く美しい娘の姿を噂し合っていました。

さて、その家の門前に、貧しい家があり、そこに麻

ふくだまろ
福田磨という少年がおりました。

ある日、牛滝川に沿って帰る道でのことです。いつもの琴の音が川面をながれ、聞こえてきます。心地よい調べに引き寄せられ気がつくくと、いつのまにか大きな樹のそばに立っていました。

「今日こそ、娘を見よう。」
ためらうことなく、麻福田磨はその樹に跳びつき、
気へのぼり、手をかざしました。

「なんとという美しさだ。」
座敷には、夢中で琴を弾く
美しい娘の姿がありました。
麻福田磨は一目で美しさに心を奪われ、娘から目が離せなくなりました。



その日から、麻福田磨は毎日をぼんやりと過ごすばかりで、食欲もありません。母親が、何度尋ねても話してくれません。そこで、友達に、わけを聞いてくれるよう頼みました。麻福田磨は、寝込んでいましたが、娘に想いを募らせていることを涙ながらに話したのです。恋の病だったのです。こればかりは家柄の違いがあり、会うことさえもありません。母親は諦めるように話しました。しかし息子はますますふさぎ込んでしまいました。そして、母親も途方にくれて、とうとう親子で病の床に臥したのです。

その後、親子の噂を娘が知ることになりました。私のために親子が不幸になつては、大きな罪をつくることになると娘は思い、「私のじいじで、寝込まれてくるじいじ、早く元気になるっていつもの生活に戻ってください。」

と、密かに使いを送りました。娘の気持ちを知った親子は、臥しては失礼になると、それから数日後、快気したのです。丁度その頃、娘から、

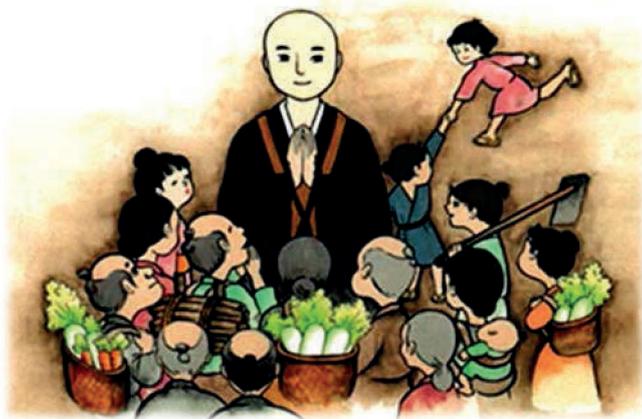
「思いは手紙に記して伝えることができます。文が届くとうれしいです。どうぞ筆を学んでください。」と、伝えられました。娘の気持ちが分かった麻福田磨は、文字を教えてもらえる人を探しました。そして、その人のもとに毎日通い、眠る間も惜しみ、文字の修得に励みました。その甲斐あって、娘とやり取りできるまでになりました。ちょうどその頃使いから、「できればお坊さんになってほしい。そうすればいつでもお会いできます。」と、娘の手紙が届けられました。嬉しくなった麻福田磨が、さらに僧になる修業を続けていきますと、「高僧になってください。そうすれば早くじいじが元気になるっていただけます。」

とのたよりです。麻福田磨は茫然ぼうぜんとしましたが、気を取り直しました。

「よし、他国あんぎゃを行脚し、立派な僧になろう。」
この志こころざしを知った娘は、麻福田磨の思いを受け止め、藤袴ふじかばを自ら織り、贈おんってくれたのです。

それからというもの、麻福田磨は、高僧の教えを受けるために諸山しよさんをまわりました。ところが、その修業しゆぎやうのさなかに娘が亡くなったことを知り、学ぶ意欲いよくを失いました。あの人に会うために学び続けているのに、と嘆なげく日々が続きました。

けれどもある日、娘の本当の導きは何であったのかということに、はっと気が付いたのです。その日から、もっと立派な僧にならなければと思いなおし、今まで以上に深く学びました。



その後の麻福田磨は、多くの經典きんぎんを読み説き、人々に教しえを請こわれるほどになりました。後には、名前なまえを智光ちこう法師ほうしと称し、多くの人に敬おやわれたのです。